



思齊のしせい

大阪府立思齊支援学校 支援室だより
第57号 令和4年6月13日

前号に続き、今号も「愛着障害」をテーマにお話しします。今号は「愛着の問題を抱える子どもの保護者への対応」について紹介します！少しでも参考になれば幸いです。（担当：支援室 竹内千恵）

【はじめに】

愛着の問題を抱える子どもの支援において、学校と保護者の間で適切かつ綿密な連携があれば、愛着形成・修復の支援は効果を持ちやすいですが、そのような連携が最初からうまくいくケースは極めてまれでしょう。保護者は自分の子育てについて他者から指摘されたくないという「自己防衛」の気持ちが生じやすく、保護者自身が愛着の問題を抱えていた場合には、自己防衛の気持ちが増幅され、「学校の対応が悪いせいだ。」と学校を批判してしまいがちです。このような背景を踏まえ、愛着に問題を抱える子どもの保護者への基本的な対応を見ていきましょう。



【保護者対応の立ち位置】

愛着障害は親の育て方だけに原因があるわけではありませんが、関係性の障害のため親子関係の問題が必ず発生しており、親子への心理的支援、関係性支援が必要になります。そうした中、学校側が保護者と向き合う形で話し合えば、どうしてもそれぞれの思いをぶつけ合うことが多くなり、保護者の側からすると、学校（教員）は自分を責める「敵」のように見えてしまいます。ですから、大切なのは「横」に並び同じ方向を見ながら「そうですね。」と共感的に対応することなのです。

こうすることで、保護者は「学校に自分の立場に立って考えてくれる味方がいる。」と実感することができ、学校と保護者の全面的対立を避けることができます。



【保護者への伝え方】

学校で起こった「問題」について保護者に伝える際に「おたくのお子さんがこんなことをしました。」と不適切な行動のみ報告するのはよくない対応であり、「お子さんにこうしてください。」と対応の仕方をお願いするのはもっとよくない対応です。連絡をもらった保護者は「私は適切な対応をしていないと責められている。」と感じてしまいます。「問題」については[問題→対応→成果]をセットとして伝えるのがよいでしょう。「お子さんにこんな問題が起きましたが、こんな対応をした結果、いい状態になりました。」と伝えることで、保護者の「私の育て方は間違っていない！」という自己防衛は働きにくくなり、家庭での子どもへの対応のヒントを伝えることにもつながります。



【要求への対応】

保護者からの要望や要求に対して「できません。」と拒否した場合、保護者は要求した内容だけでなく、要求しなくなった自分の気持ちまで否定されたように感じてしまう可能性があります。ですので、要求内容と要求しなくなった気持ちを切り離して受け止めることが大切です。「要望されたい気持ちはわかります。」「要望する行動までして下さったことに感謝しています。」と伝えた上で「申し訳ありませんが、その要望の全てに応えることはできません。しかしながらその気持ちを踏まえて努力・工夫をしていきたい。」と伝えることが重要です。

参考文献：米澤好史『やさしくわかる！愛着障害』ほんの森出版,2018.

(上記の文献を参考に作成した文章のため「障害」の文字を使用しています。)

子どもへの支援と同様に保護者の気持ちへの感受性を持ち、その気持ちに寄り添う支援が必要です。

